

令和3年度自己評価シート(中間評価)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋一彦	全・定・通	本・分
----	------------	-----	----------------	------	------	-------	-----

1 (1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す

【短期(本年度)経営目標】 IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。	
【本年度行動計画】 ・教職員研修を実施し、本校のアイデンティティが具現化した姿を共有する。 ・保護者に対し、コーディネーターニュース等を用いた情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を示す。 ・生徒が、活動の目的と本校の目指す姿の関係性を振り返る活動を意識的に取り入れる。	評価 A

【短期(本年度)経営目標】 日本の学習指導要領とIBプログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、PLチームの示す方向性を基に、IB推進チームと教科会の間でミドルアップダウンを行うなどして、研究推進の校内組織の活性化が図られている。	
【本年度行動計画】 ・PLミーティングの定期的な実施とIB推進チームの効果的な接続を行う。 ・MYPチーム会議、DPチーム会議の定期的な実施と各教科会への効果的な接続を行う。 ・各教科会を定期的かつ効果的に実施する。	評価 B

【短期(本年度)経営目標】 校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IBプログラムの充実が図られている。	
【本年度行動計画】 ・島内企業におけるインターンシップを実施する。 ・島のニーズを捉えたSA(Service as Action)を実施する。 ・各教科における校外の資源を活用したカリキュラムを充実、改善(他校連携を含む)する。	評価 B

1 (2) 中間評価のまとめ

評価結果の分析	<p>・本校の教育活動の様々な場面において、本校のアイデンティティを具現化した姿(生徒・教職員が本校のミッション・ビジョン等を自らの言葉で表現し行動しようとする姿等)を確認することができた。中学校第3学年生徒を対象に実施された全国学力・学習状況調査の集計結果において、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある生徒の割合」が、全国平均 43.8%に対して本校は 84.2%と非常に高い水準であった。保護者については、当初計画どおりコーディネーターニュース等を用いた情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を継続的に示すことができています。</p> <p>・PLミーティング、MYPチーム会議、DPチーム会議及び各教科会の定期的、効果的な実施を担保するため、各会議の実施時間を時間割の中に位置付けるとともに、議事録をクラウド上に格納することで、会議間接続のための土台となる情報資源の基盤を整備することができた。また、MYPチーム会議及びDPチーム会議では、教科横断的な取組の推進を図るため、各教科の実践事例を共有する機会としても活用できている。</p> <p>・島内企業におけるインターンシップを昨年度に引き続き実施できている。また、幼児対象の英語活動会を生徒自ら企画・実施するなど、地域のニーズを捉えたSAが実施できている。</p>
今後の改善方策	<p>・高等学校開校に伴う外国人留学生等の円滑な受入れに向けて、多様な文化を尊重し受け入れる学校文化を醸成・浸透させるための取組を強化する。また、保護者については、本校の6年間の体系的な教育活動に関する理解の深化を図るため、コーディネーターニュース等による情報発信に加えて、オンライン説明会の実施など双方向にコミュニケーションできる機会の確保に努める。</p> <p>・教職員間の協働設計を促進するために、教科会に別教科の教員やDPコーディネーターが参加するなど、各会議の枠にとらわれない柔軟な会議運営を通して、教科間の有機的な接続を図る。</p> <p>・島内企業へのインターンシップや地域のニーズに基づいたSAの継続実施に加えて、パーソナル・プロジェクトにおいても地域資源を生かしたプロジェクトを実施できるように、これまでの人的資源を活用しながら生徒の企画実現に向けたサポートを組織的に行う。</p>

<p>学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な価値観や文化を尊重する学校文化の醸成に向けて、計画的かつ組織的な取組を継続する。 ・地域資源、地域人材を積極的に活用することにより、地域と共にある学校づくりを目指すとともに、本校での実践的な取組を県内の各校へ還元していく。
------------------------------	--

2 (1) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する

<p>【短期(本年度)経営目標】 授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・重点的に育成する5つの資質・能力と ATL(Approaches to Learning)の関係性を整理することで、各学年で目指す姿を、生徒及び教職員で共有する。 ・授業などの教育活動において整理した ATL スキルが発揮され、伸長できる指導と学習を実践する。</p>	<p>評価</p> <p>A</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 生徒が実社会の正解が存在しない問いに向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、3年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・ルーブリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力を高める指導計画の充実を図る。 ・未来創造科において、実社会の複雑な文脈の中で、自ら設定した課題を解決する過程において、各教科で身につけた見方・考え方を働かせることができるプログラムを開発する。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・年間3回の授業交流月間を軸とした教員研修の充実を図ることで、それぞれの教員が、自らを高めるための研究・研修に積極的に取り組み、自己変革できる教員集団を目指す。 ・各教科での教育実践を教員研修等の場で共有することで、教科を越えた指導方法の確立と教科横断型の単元づくりの機会を創出する。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

2 (2) 中間評価のまとめ

<p>評価結果の分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・重点的に育成する5つの資質・能力と ATL の関係性を、ルーブリックを用いて整理し、生徒及び教職員で共有することができた。生徒及び教職員を対象に実施したアンケート結果は、生徒の自己評価の平均値が 2.95 であり、ほぼ目標値に到達している状況である。また、教職員の自己評価の平均値も 3.0 であり、すでに目標を達成できている。 ・指導計画の充実については、教職員対象のアンケート結果(自己評価の平均値)が 2.86 であり、目標値に近い数値であることから、多くの教員が ATL と単元の目標等との関係性を明確にした指導計画を作成できたと感じているといえる。また、未来創造科については、中学校第3学年生徒が実施している自己探究プログラムでパーソナル・プロジェクトや DP のフィルムを意識したプログラム開発を行うなど、次年度を見据えた取組を実施できている。 ・授業交流月間の実施を通じて、教科の枠を越えた授業実践事例を共有した。MYP チーム会議では、言語(日本語及び英語)の発達や各教科でのレポートやプロセスジャーナルに関する取組を共有するなど、教科横断的なテーマに基づく研修を実施した。DP チーム会議でも、探究的な学びや CAS・TOK などの教科横断的なテーマに基づく研修を実施した。教職員対象のアンケート結果(協働設計に関する自己評価の平均値)が 2.74 であり、目標値に近い数値となっている。
<p>今後の改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期末段階の生徒の自己評価を基に、2学期以降に重点的に取り組むべき ATL を定め、全教科一体となって対策を講じる。また、生徒ごとに ATL の定着状況が異なるため、学年会と連携した個別指導を行う。中学校第3学年生徒については、パーソナル・プロジェクトが開始することを鑑み、MYP 段階で自身が身につけた ATL を整理し、意識的に活用することできるよう働きかけを行う。 ・教科の枠を越えた IDU(Interdisciplinary Unit)の計画・実施を通じて、ATL を活用した指導計画を共有するとともに、教科や単元の目標と ATL の関係性に関する実践事例の共有を行う。未来創造科については、現中学校第3学年生徒に対して、令和4年4月からスーパーバイザーの個別指導が可能となるよう指導体制の構築を検討する。また、中学校第1学年次及び第2学年次のプログラムについては、持続可能なプログラムとなるよう改善する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・10月及び2月に予定している授業交流月間を中心に教科の枠を越えた授業実践の事例共有を行うとともに、教代会、MYPチーム会議及びDPチーム会議を、教職員間の協働設計を促進する機会として捉え、柔軟な運営を実施する。
<p>学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・長期的な視点を持ち、持続可能性を意識して、PDCAを働かせながら、計画的、継続的に改善を図っていく。 ・教科横断的な学びや探究的な学びの充実に向けて、ATLを意識してデザインしたカリキュラムを協働して実施していく。

3 (1) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める

<p>【短期(本年度)経営目標】 集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成員であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・生徒会活動と寮での係活動とを関連付け、一人一人がリーダーとフォロワーの両面を経験し、様々な役割に対して、責任感を持って取り組み、集団生活の安定に向けて貢献できるようにする。 ・自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・寮則の意味や目的を考えさせ、何のために守らなければならないのかを理解し実践できるような機会を創出し、評価場面を設定する。 ・異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションの充実を図るための機会を通して、協働することや、他者の役に立ったり貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身につけている。</p>	
<p>【本年度行動計画】 ・日々の食事指導及び食に関する指導を行い、食事のマナーや望ましい栄養などの食生活に関する正しい知識を習得させる。 ・地場産物を活用した郷土料理の提供を通して、食事に興味・関心を持たせる。</p>	<p>評価</p> <p>A</p>

3 (2) 中間評価のまとめ

<p>評価結果の分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・寮生活に関するアンケート調査項目「自分の役割に対して責任を持って取り組むことができているか」「寮のしおり(寮則)に記載されている集団生活におけるルールやマナーを守り、安心・安全な寮生活に貢献することができるか」「寮のしおり(寮則)の見直しにおいて、集団生活におけるルールやマナーの目的を理解し、寮生活で実践することができるか」において、個人において自分の役割や責任を果たしたり、ルールやマナーの目的やその意味を理解し、実践したりすることができるという回答は、約98%であり、個々の生徒については、集団生活におけるルールやマナーを守る意識の向上を図ることができている。 ・規律ある生活の実践や課題解決のために積極的に他者へ関わるといった回答は、約25%であった。授業で見せる他者へ積極的に関わる姿とは異なり、生活場面では他者への関わりが希薄になるといったことが考えられる。授業とは違うプライベートを含む日常生活では、他者との関わり方に困難を抱えていたり、積極的に他者へ働きかけることができなかつたりすることが予想される。 ・食生活に関するアンケートにおいて、肯定的な回答が約84%であり、今年度の目標値を達成している。アンケートの中で「日本の伝統的な食文化や行事食」「諸外国の食文化」「食品ロス」について興味・関心があるという肯定的割合が高い。これは、本校の特徴である、次年度からの留学生受け入れや、グローバルな視野を持たせた教育活動が生徒の興味・関心を高めていると考えられる。一方で、好き嫌いをしていたり、残食が多かつたりといった生徒の実態があることから、食文化や食品ロスなどの食に関する興味・関心や問題意識を身近な生活につなげることができていない面がある。
----------------	--

<p>今後の改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会活動との連携を密に図り、生徒会活動の経験を十分に活かせるような自治的な活動を促進し、寮全体およびユニット内における生徒間の交流を活発にするとともに、生徒一人一人にリーダーとフォロワーを経験させることで、責任と自信を持たせ、お互いに声をかけ合ったり、助け合ったりするなどの生徒同士の関わり合いの機会を増やす。 ・アンケートで示した寮生活における行動目標と寮生活における行動を振り返らせる機会を作り、生徒自身が寮生活における自分自身の行動を自己評価することで、生徒が明確な目標を持ちながら寮生活を送ることを促す。 ・栄養教諭と連携した食に関する授業を展開し、生徒の食に関する知識・理解を深めるとともに、普段の自分自身の食生活を振り返らせ、生徒自身の自己管理能力を高める。また、給食委員会において、食品ロスについて考える活動や正しい食事のマナーおよび間食の取り方などを啓発する活動を促す。
<p>学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢集団としての強みを最大限に活かし、各ユニット内でリーダーシップ、フォロワーシップを発揮させることができるような場面や機会を設定していく。 ・振り返りの機会を設定し、生徒の自律心を涵養し、自治活動へとつなげていく。 ・学校生活を通じて食事や睡眠、心身の発達や健康について生徒一人一人が内省する機会を提供していく。

4 働き方改革に関する短期（本年度）目標

<p>【短期(本年度)経営目標】 教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。</p>	
<p>【本年度行動計画】 子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。</p>	
<p>【本年度行動計画】 本校において設定した入退校時刻を意識した業務遂行ができるよう各分掌や学年で検討し、好事例を全体で共有する。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

<p>【短期(本年度)経営目標】 教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。</p>	
<p>【本年度行動計画】 働き方改革取組方針等について、全体研修等で十分理解を深めるとともに、自らの取組状況を振り返り、課題や対策を見出す機会を設定する。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>

2 中間評価のまとめ

<p>評価結果の分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・4月28日(水)の職員会議で、「令和2年度の働き方改革に係る各分掌、学年の振り返り」を示し、今年度も働き方改革に向け、取組を継続していくことを周知するとともに、学校衛生委員会で在校時間の縮減に向けて意識統一を図った。現時点で約80%の教職員が在校時間が45時間以下となっていることから、業務改善、在校時間の縮減についての意識が高まっていることがわかる。 ・9月22日(水)に実施した職員研修において、中央教育審議会答申、本県の学校における働き方改革取組方針等の「働き方改革」に係る資料を活用し、子供と向き合う時間の定義等を再確認するとともに、働き方改革を推進していくうえで、必要な方策について共有した。また、上記の取組の振り返りを活用し、好事例についてグループで協議し、それぞれの立場で取組を持続可能なものにしていくよう周知した。研修で実施したアンケート調査の結果から90%の教員が、「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」ことが分かった。
----------------	---

<p>今後の改善方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体研修として実施してきた働き方改革取組方針に係る研修の内容を踏まえ、各分掌や学年会で、会議の定例化や文書回覧による会議回数の縮減など、働き方改革取組方針に沿った、課題に応じた取組を工夫しながら実施する。 ・下半期においては、主任に対する人材育成を行い、マネジメント力の向上を図ることで、業務の見直しや業務分担の平準化を推進していく。
<p>学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革に対して教職員一人一人が当事者意識を持ち、引き続き在校時間の縮減に努める。 ・教職員の年齢構成やワークライフバランスを踏まえ、OJTの視点から人材育成に努めていく。 ・職員一人一人の資質・能力を高め、学校全体としてのマネジメント力の向上に努める。